

第107回 三方限古典塾（'15.9.17）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3-24）

※ 菜根譚前集では主として人との交わりを説き、後集では自然と閑居の楽しみを説いている。

1 おもむき 趣を得るは多きに在らず。盆池拳石の間にも、煙霞は具足す。景に会うは遠きにあらず。蓬窓竹屋の下にも、風月は自ずから賒かなり。 後集5

（意識） 自然の情趣をしみじみと味わうには、出かけて多くのものを見る必要はない。箱庭ほどの小さな庭にも、霞たなびく美しい山水の景色を感じ取ることはできる。

趣の深い景色を愛でるには、何も遠くまで出かける必要はない。草むしたあばら屋にも、爽やかな風や明るい月の光が、はるかかなたから等しく訪れてくるので趣が深い。

（余説） つい見過ごしてしまう身の回りの自然や日常の一コマに、何かを感じ取り、そこから世の中の真理を読み取れるような感受性を持つように努めると、精神の老化をいくらかでも遅らせ、人間らしく生き続けることに役立つのかも知れません。吉田兼好は徒然草の75段で「自己と自然を冷静に見つめること」の大切さを延べています。

メーテルリンクの童話「青い鳥」では、貧しい二人の子ども、兄のチルチルと妹のミチルが、夢の中で妖精に頼まれ幻想的世界をさまよい歩きます。ところがその「幸せの青い鳥」は、家の中にいたのです。妖精は二人に「幸せはすぐ側にあっても、気づきにくいものだよ」と教えたのでした。心を動かす自然も景色も幸せも身近にあるはずです。

（参考）松尾芭蕉「よく見れば 薺花咲く 垣根かな」

藤原定家「見渡せば 花ももみじも なかりけり 浦の苔屋の 秋の夕暮れ」

2 静夜の鐘声を聴きては、夢中の夢を喚び醒まし、澄潭の月影を観ては、身外の身を窺い見る。。 後集6

（意識） 静かな夜半に響き渡る鐘の音の聞くと、人生という大きな夢の中で見ているもう一つの夢の世界から呼び醒まされて、真実の自分の心を感じることができる。

水が澄んでいる深い淵に映っている月影を見ると、人間の肉体はこの月影のように実体のない仮のすがたであり、体の外にあるもう一つの自己を感じるとることができる。

（余説） 夢とは実に不思議なものだと思つづく思います。ここの「夢中の夢」とは、私たちが眠っていて見る普通の夢のことです。荘子は人生は「大きな夢」であると考え「胡蝶の夢」など夢に関するよく知られた話がいくつかあります。また、自分の中にはまだ自分も分からない「もう一人の自分」が住んでいると言われ、それが身外の身です。

豊臣秀吉の辞世は「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことは 夢のまた夢」です。露のようにこの世に生まれ落ち、そして露のように儚く消えていくこの身。大阪城で過ごした地位、名誉、財産、享樂を極めた栄華の日々は何だったのか。夢の中で夢を見ているような、儚く空しい一生だったと解釈されています。凡夫と無常への嘆きです。

私たちがいつかは大きな夢が終わる時がきます。その時に秀吉のような切ない気持ちにならずに、「本当の自分の心を自分で知る」ことができ、感謝と納得と満足と笑顔で終わることができるには、この人生をどう生きればよいのでしょうか。

（参考）莊子齊物論 「莊周夢に胡蝶と為る」「大覺有りて而る後に此の大夢なるを知る」

3 鳥語虫声も、総て是れ伝心の訣なり。花花草色も、見道の文に非ざるはなし。学ぶ者は、天機清徹、胸次玲瓏にして、物に触れて、皆、心に会する処有るを要す。 後集7

(意訳) 小鳥のさえずりや虫の音は、すべてそのまま宇宙の真理を心を以て心に伝えている肝要な奥の手、秘訣である。あでやかな花や緑色の草も、すべて天地の真理を語り伝える文字なき文字でないものはない。

それを学ぼうとする者は、天から授かった自らの本心を玉のように澄みとおらせ、胸中を一点の曇りもないようにしておいて、見るもの・聞くもの・触れるもののすべてから、真理を学び取ることが必要である。

(余説) 比叡山の天台宗や高野山の真言宗を密教と呼びます。仏教の教えの根本は宇宙に遍在する宇宙仏です。その宇宙仏が語るのは非常の言葉であり極めて難解です。それを直接聞こうとするのが密教です。宇宙仏の教えを直接聞くには、心を「清徹・玲瓏」にするために回峯行など、非常に厳しい修行が不可欠と考えられています。修行していない私などには、鳥語虫声や花花草色に仏を感じるのには、土台無理な相談です。

一方、宇宙仏の言葉を仮の姿で仲介し、理解しやすく教えを説くのが、釈迦仏の役割で、その教えを聞くのが浄土真宗などが密教です。法然上人は苦行を否定しています。

(参考) 禅語 「以心伝心・不立文字・教外別伝・直指人心」

4 人は有字の書を読むを解するも、無字の書を読むを解せず。有弦の琴を弾ずるを知るも、無弦の琴を弾ずるを知らず。迹を以て用い、神を以て用いずば、何を以て琴書の趣を得んや。 後集8

(意訳) 世の人は、文字で書かれた書物を読むことはしても、文字で書かれていない書物を読み取ることにはしない。また、弦が張ってある琴を弾くことはしても、弦の張っていない琴を弾くことはしない。

文字や弦といったような形のあるものだけを信じて、精神的なものをないがしろにしていたのでは、どうして琴や書物がほんとうに語ろうとする心を理解できるであろうか。

(余説) ここの「無字の書」とは、前段でいう「宇宙仏」の語りかけです。それは象徴的で非常のメッセージですから、なかなかの極めて難解です。また、「無弦の琴」についても同様で、音楽を耳で聞くのではなく心で聞くことも難しいように思われます。

しかし、そのような形のない、文字や言葉も越えた「心の世界」という大切なものがありそうだということは、認めてもよいのではないかと考えます。

形あるものを重視して、精神的なものを軽くみる風潮もありますが、見直してみる機会かも知れません。「心とは何か。どこにあるのか。脳とどんな関係にあるのか。意識とは何か。無意識とはどんなものか」など考えてみたいものです。

楊震の四知「天知る、神知る、子知る、私知る」での天や神は、実感があります。

(参考) サン・テグジュペリ (星の王子さま) 「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えな
いってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」

「そうだよ、家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないのさ。」